

白

芥川龍之介

青空文庫

ある春の午過ぎひるです。白しろと云う犬は土を嗅かぎ嗅かぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生垣いけがきが続つき、そのまた生垣あいだの間にはちらほら桜なども咲さいています。白は生垣に沿いながら、ふとある横よこ町ちようへ曲まりました。が、そちらへ曲まつたと思うと、さもびっくりしたように、突然立ち止とつてしまいました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印しるし半纏ばんてんを着た犬殺わなしが一人、罫わなを後うしろに隠かくしたまま、一匹の黒犬を狙ねらつて

いるのです。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせ**い**ばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙われているのはお隣の飼犬の黒な**くろ**のです。毎朝顔を合せ**る**度にお互の鼻の匂を嗅ぎ合う、大の仲よしの黒な**くろ**のです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子ひょうしに犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ 貴様から先へ**わな**にかけろぞ。」——犬殺しの目にはありありとそう云う嚇おどかしが浮んでいます。白は余りの恐ろしさに、思**ほ**わず吠えるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじつとしてはいられぬほど、臆病風おくびょうかぜが立ち出した

のです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後すざりを始めました。そうしてまた生垣の蔭に犬殺しの姿が隠れるが早いかわい可哀そうな黒を残したまま、一目散に逃げ出しました。

その途端に罾が飛んだのでしよう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往来どめの縄を擦り抜け、五味ための箱を引っくり返し、振り向きもせず逃げ続けました。御覧なさい。坂を駈けおりるのを！

そら、自動車に轢かれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が蛇のように唸っているのです。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

二

白はやつと喘あえぎ喘あえぎ、主人の家へ帰つて来ました。黒くろ堀へいの下
の犬くぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏
庭です。白はほとんど風のように、裏庭の芝生しばふへ駈かけこみました。
もうここまで逃げて来れば、罨わなにかかる心配はありません。おま
けに青あおした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボオル投げ
をして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えば好いいの

でしよう？ 白は尻尾しっぽを振りながら、一足いっそくと飛びにそこへ飛んで
行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日けふは犬殺しあに遇あいましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。（もつともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆気あっけにとられたように、頭あたまさえ撫なでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒

君は掴つかまりましたぜ。」

それでもお嬢さんや坊ちゃん顔を見合せているばかりです。

おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ云い出すのです。

「どこの犬でしょう？　春夫はるおさん。」

「どこの犬だろう？　姉さん。」

どこの犬？　今度は白の方が呆あっけ気にとられました。（白にはお

嬢さんや坊ちゃん言葉もちやんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。しか

し我々は犬の言葉を聞きわけることが出来ませんから、やみ闇の中を見通すことだの、かすかな匂においを嗅かぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。」

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！ けれどもお嬢さんは不相あいかわらず変気味悪そうに白を眺めています。」

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやにながら、考え深そうに答えました。

「こいつもからだじゆう体中まつ黒だから。」

白は急に背中さかだの毛が逆立つように感じました。まつ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬ぎゆうにゆうの時から、牛乳ぎゆうにゆうのように

白かったですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足あとあしも、すらりと上品に延びた尻尾しっぽも、みんな鍋底なべそこのようにまつ黒なのです。まつ黒！まつ黒！白は気でも違つたように、飛び上つたり、跳ね廻はつたりしながら、一生懸命に吠え立ほてました。

「あら、どうしましょう？ 春夫さん。この犬はきつと狂きょうげん犬だわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんゆうかんは勇敢です。白はたちまち左の肩をぽかりとバツトに打たれました。と思うと二度目のバツトも頭の上へ飛んで来ます。白はその下をくぐるが早いもとか、元来た方へ逃

げ出しました。けれども今度はさっきのように、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生しばふのはずれには棕櫚しゆろの木のかけに、クリイム色に塗ぬった犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまつ黒になっても、やっぱりあの白なのですよ。」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに震ふるえていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめるはずはありません。現にお嬢さんは憎にくらしそうに、

「まだあすこに吠ほえているわ。ほんとうに凶ずうずう々しい野良犬のらいぬね。」
などと、地だんだを踏んでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃ

んは小径こみちの砂利じやりを拾うと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜生ちくしよう！ まだ愚図ぐずぐず愚図ぐずぐずしているな。これでもか？ これでもか？」

「砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲にじむくらい当ったのもあります。白はとうとう尻尾しっぽを巻き、黒塀の外へぬけ出しました。黒塀の外には春の日の光に銀の粉こなを浴びた紋もん白蝶しろちょうが一羽、気楽そうにひらひら飛んでいきます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩もらしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

お嬢さんや坊ちゃんに逐おい出された白は東京中をうろうろ歩き
ました。しかしどこへどうしても、忘れることの出来ないのはま
つ黒になった姿のことです。白は客の顔を映うつしている理髪店りはつてんの
鏡を恐れました。雨あまあが上りの空を映している往來おうらいの水たまりを
恐れました。往來の若葉を映している飾かざり窓まどの硝子ガラスを恐れまし
た。いや、カフェのテエブルに黒ビイルを湛たたえているコップさえ、
——けれどもそれが何になりましたよう？ ああの自動車自動車を御覧ごらんなさ
い。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。
漆うるしを光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映し

ました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待の自動車のように、到るところにある訣わけなのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに唸うなったと思うと、たちまち公園の中へ駈かけこみました。

公園の中には鈴すず懸かけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂たれたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇しろばらに群むらがる蜂はちの音が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜みにくい黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうか分かりません。

白はただ夢のように、ベンチの並んでならいる路ばたみちへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が上がったのです。「きやん。きやん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いみふるをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮かべたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間あいだのことです。白は凄じすさまい唸りうな声を洩もらすと、きりりとまた振り返りました。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆おくびよう病ものになるな！ きやあん。臆

病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈かけ出しました。

けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しな
どではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二
三人、頸くびのまわりへ縄なわをつけた茶色の子犬を引きずりながら、何
かわいらい騒さわいでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまい
ともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返していました。し
かし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。ただ笑
ったり、怒鳴どなったり、あるいはまた子犬の腹を靴くつで蹴けったりする

ばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。また實際白の容子は火のように燃えた眼の色と云い、刃物のようにむき出した牙の列と云い、今にも噛みつくかと思うくらい、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には余り狼狽したはずみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた後、くるりと子犬を振り返ると、叱るようこう声をかけました。

「さあ、おれと一しよに来い。お前の家まで送ってやるから。」

白は元来た木々の間へ、まっしぐらにまた駈けこみました。茶

色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇ばらを蹴散けちらし、白に負けまいと走つて来ます。まだ頸にぶら下つた、長い縄をひきずりながら。

×
×
×

二三時間たつた後のち、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇たたずんでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機ちくおんきは浪花節なにわぶしか何かやっているようです。子犬は得意とくいそうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒たいしょうけんと云うカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？——おじさんはずっと遠い町にいる。」
白は寂しそうにため息をしました。

「じやもうおじさんは家うちへ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」
「御主人？ なぜまたそんなことを尋たずねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊とまって行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳ごちそうだの、カレエ・ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフエの屋根のはずれに、三日月もみかづきそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？　白と云うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。ぜひまた近い内うちに一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「御機嫌好ごきげんよう、白のおじさん！　さようなら、さようなら、さようなら！」

四

その後の白は^{のち}どうなつたか？——それは一々話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。大かた^{おお}どなたも御存じでしょう。たびたび^{たびたびあやう}危い人命を救つた、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。また一時『義犬^{ぎけん}』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白^{しろ}だつたのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方^{かた}があれば、どうか下^{しも}に引用した新聞の記事を読んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日（五月）午前八時^{しじつぶん}四十分、奥羽線^{おううせん}上り^ぼ急行列車が田端^{たばたえき}駅附近の踏切^{ふみきり}を通過する際、踏切番人の過失^よに依り、田端一二三会社員柴山^{しばやま}鉄太郎の長男^{さねひこ}実彦（四^し歳^{さい}）が列車の通る線路内に立ち入り、危く^{れきし}轢死^とを遂げようとした。

その時^{たくま}遅しい黒犬が一匹、稲^{いな}妻^{なづま}のように踏切へ飛びこみ、目前に迫^{せま}つた列車の車輪から、見事に実彦を救い出した。この勇敢なる黒犬は人々の立^{たち}騒^{さわ}いでいる間^{あいだ}にどこかへ姿を隠したため、表^ひようしよう

彰 したいにもすることが出来ず、当局は大いに困っている。

東京朝日新聞。軽^{かる}井^い沢^{ざわ}に避暑中のアメリカ富豪エドワード・

バアクレエ氏の夫人はペルシア産の猫を寵^{ちよう}愛^{あい}している。すると最近同氏の別荘へ七尺余りの大蛇^{だいじや}が現れ、ヴェランダにいる猫を呑もうとした。そこへ見^み慣^なれぬ黒犬が一匹、突然猫を救いに駈^かけつけ、二十分に亘^{わた}る奮闘の後^{のち}、とうとうその大蛇を噛^かみ殺した。しかしこのけなげな犬はどこかへ姿を隠したため、夫人は五千^{ドル}弗の賞金を懸^かけ、犬の行方^{ゆくえ}を求めている。

国民新聞。日本アルプス横断中、一時行方不明になつた第一高等学校の生徒三名は七日（八月）上高地の温泉へ着した。一行は穂高山（ほたかやま）と槍ヶ岳（やりたけ）との間に途を失い、かつ過日の暴風雨に天幕（テント）糧食等を奪われたため、ほとんど死を覚悟していた。然るにどこからか黒犬が一匹、一行のさまよつていた溪谷（けいこく）に現れ、あたかも案内をするように、先へ立つて歩き出した。一行はこの犬の後（あと）に従い、一日余り歩いた後（のち）、やっと上高地へ着することが出来た。しかし犬は目の下に温泉宿の屋根が見えると、一声嬉し（ひとこゝえ）そうに吠（ほ）えたきり、もう一度もと来た熊笹（くまざさ）の中へ姿を隠してしまつたと云う。一行は皆この犬が来たのは神明（しんめい）の加護だと信じている。

時事新報。十三日（九月）名古屋市の大火は焼死者十余名に及

んだが、横よこぜき関名古屋市長なども愛児を失おうとした一人である。令息武矩たけのり（三歳）はいかなる家族の手落からか、猛火の中の二階に残され、すでに灰燼かいじんとなろうとしたところを、一匹の黒犬のために啣くわえ出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺ぼくさつを禁ずると云っている。

読売新聞。小田原町城内公園に連日の人気を集めていた宮城巡みやぎ回動物園のシベリヤ産大おお狼おおかみは二十五日（十月）午後二時ごろ、突然巖がんじょう乗おりな檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面のちへ逸走いつそうした。小田原署はそのために非常動員を行い、全町に亘わたる警戒線を布しいた。すると午後四時半ごろ右の狼は十字町じゆうじまちに現れ、一匹の黒犬と噛かみ合いを初めた。黒犬は悪戦すこぶ頗る努め、つい

に敵を噛み伏せるに至った。そこへ警戒中の巡査も駈^かけつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ジガンテイクスと称し、最も兇^{きよう}猛^{もう}な種属であると云う。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どった告訴^{こくそ}を起すといきましている。等^{とう}、等^{とう}、等^{とう}。

五

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰つて来ました。勿^{もちろん}論お嬢さんや坊ちゃんはどうに床^{とこ}へはいつています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそ

りした裏庭の芝生しほふの上にも、ただ高い棕櫚しゆろの木の梢こずえに白い月が一輪浮んでいだけです。白は昔の犬小屋の前に、露つゆに濡ぬれた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独ひとりごと語ことを始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまつ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍ひょうし子すずに煤すすよりも黒い体を見ると、臆病を恥はじる気が起つたからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦つたりしま

した。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはとうとう苦しきの余り、自殺しようとした。ただ自殺をするにつけても、ただひとめ一目会いたいの可愛がって下さった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんにはあしたにもわたしの姿を見ると、きつとまた野良のらいぬ犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんののバツトに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい。」

白は独ひとりごと語を云い終ると、芝生しばいふにあをさしのべたなり、いつかぐつすり寝入ってしまった。

×

×

×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はつきりと目を開ひらきました。見ればお嬢さんや坊ちゃんたは犬小屋の前に佇たんだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしま

いました。お嬢さんや坊ちゃん、白が真っ黒に変わった時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔こうかいする気さえ起りました。するとその途端とたんです。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思つたのでしよう。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかりと白の頸くびを押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じつと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映うつつています。高い棕櫚しゅろの木のかけになったクリム色の犬小屋が、——

そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒こめつぶほどの小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。清らかに、ほっそりと。——白はただ恍惚こうこうとこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱だきしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張いばっているのを！

「へっ、姉さんだつて泣いている癖に！」

(大正十二年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「女性改造」

1923（大正12）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白
芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>